

上肢の画像診断

岡本嘉一・橘川 薫●著

〔評者〕江原 茂(岩手医科大学・放射線医学講座)

岡本嘉一(筑波大学医学医療系臨床医学域・放射線診断学)・橘川 薫(聖マリアンナ医科大学・放射線医学講座)の両氏による上肢の画像診断の教科書が上梓された。上肢の関節の画像診断については、肩関節を扱った教科書はすでに内外にみられるが、このユニークな書籍は上肢でも肩を除いたより末梢の上腕から手までを扱っている。上肢の画像診断に関する先行書籍にはさらに Chung & Steinbach の MRI of the Upper Extremity (2010 年, Wolters Kluwer/LWW) がある。MRI を扱っている点で類似していると思われるが、この肩も含めた書籍では、肘関節と手関節を疾患別でなく部位別に扱っている点でスタイルに違いがある。本書では題名は画像診断とあり、従来の X 線検査や CT を解説に盛り込んでいるが、実際には MRI に重点を置いていることは明らかで、先行する教科書に劣らないくらい画像診断の今日的な状況を色濃く反映している。

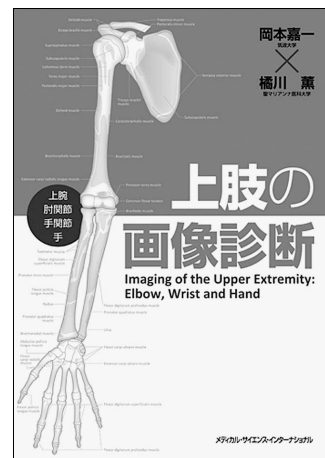
このユニークな書籍の従来の教科書との違いは内容にあり、解剖のアトラスに続く章ではスポーツ外傷や神経絞扼に始まり、残りの半分近くを外傷・腫瘍・関節炎といった骨・関節領域の基本的な領域をカテゴリー別に扱っている。特に内容の特徴としては著者のお一人である岡本氏が肘関節のス

ポーツ傷害に取り組んでこられた成果が十分に盛り込まれている。

本編の第 1 章は筋腱付着部と神経支配で、筋腱付着部の表とイラストでまとめられており、第 2 章は MRI 断層解剖で、MRI のアトラスである。これらは読むためではなく、検査読影に実際に用いるための道具立てとなっている。また第 3 章は一般的な上肢の MRI 撮像法の解説を行っており、経験豊かな著者によるきめ細かな配慮の必要な上肢関節の撮像の工夫を扱う内容である。

第 4 章のスポーツ障害は、第 6 章の外傷全般からは独立した章立てで、特に岡本氏が検討を進めておられる若年者の投球による肘障害を詳しく解説している。次章の神経絞扼も従来は画像診断の困難であった上肢末梢神経の絞扼障害を高解像の MRI を用いて診断するにあたり、簡便ながら当を得た解説を行っている。これらは本書のもっとも特徴的と言える部分である。

第 6 章は外傷で単純 X 線、CT を中心に橘川氏が、第 7 章は腫瘍および腫瘍類似病変で、MRI 所見を主体に骨・軟部腫瘍の解説を岡本氏が、第 8 章は炎症・変性その他の関節疾患を橘川氏が解説している。外傷・腫瘍・関節炎の解説は骨・関節の教科書のもっとも中心になるべき領域で全体の半分近くのページを割いている。特に



リウマチ疾患の MRI 診断は鋭敏でかつ広範囲をカバーできるため、早期の変化を有効に検出できる特徴があり、現在求められている初期変化の検出に対応することができる。

本書は 230 ページほどの厚さの、肩を除く上肢の画像診断を MRI を主体に扱う特徴ある出版物である。このようなユニークな教科書を仕上げた岡本・橘川両氏に敬意を表したい、またこの書を、MRI を用いた骨・関節の診断を日常行っている方々におすすめしたい。

B5・240 頁 図 37・表 8・写真 462
2017 年
定価：本体 7,000 円＋税
[ISBN978-4-89592-870-0]
MEDSi 刊